

## ジョン・ウエスレーと教育

リチャード・P・ハイツェンレーター

(山内一郎 訳)

### はじめに

先日、神学校の基金キャンペーンの趣意書を準備している同僚からEメールが届き、ウエスレーの言葉の中に募金広報のために使える名言あるいはこれはいける！と言えるような名句があれば教えてほしいという依頼があった。しかし私が彼に送付したウエスレーの言葉はあまり役には立たなかったと思う。曰く「守銭奴たちはキリスト教社会を毒するベストのようなものだ」「富を得る者は、神の恵みを失う」「金銭の豊かさと（人間としての）センスの豊かさとは別である」「私にとって金銭とは何か。それは塵芥のようなものだ」等々。<sup>(1)</sup>

(1) Minutes of Some Conversation (1781), Qu. 31, Betty M. Jarboe, Wesley Quotations (Lanham, MD: Scarecrow Press, 1990), 90からの引用。Cf. John Telford, ed., Letters of John Wesley, December 26, 1776 (London, 1931), 6:258; The Doctrine of Original Sin, in Thomas Jackson, ed., The Works of John Wesley (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1959), 9:230; Letters (Telford), June 20, 1776, 5:13. ウエスレーは、ホワイトフィールド (George Whitefield) が、本来孤児院のために募った贖金を使ってジョージアにアカデミーの開設を計画していることを知り、彼の友人にこう書き送った。「この地上で、孤児を育て上げることにまさる愛の労苦が他にあるでしょうか。この事業に比べれば、コレッジやアカデミーはとるに足りません…あなた方は孤児院建設のために土地の提供を受け資金を集めたはずです。それを、少なくともジョージアに今なお孤児院が必要とされているこの時期に、あなた方の裁量で他の目的に充当する権限があるのでしょうか」。Letters (Telford), February 21, 1770, 5:184.

実はこの論考の準備に取り掛かったとき、私自身が同じ羽目に陥ったと思われた。というのも、ウエスレーはかつてスコットランドの4つの大学で、学生たちが11月から翌年5月までしか学内に寄宿せず、一年の半分はのらくら時を過ごすことを聞き、「一体そのようなコレッジを開設した人たちの良識がどこにあるのか疑わしい」と書き記しているからである。<sup>(2)</sup> また後年、ウエスレーが自分の心情を吐露し、「私は今、かつてほど（オックスフォード）大学を称賛しない」<sup>(3)</sup>と語ったこと、そしてウエスレーの教育観がしばしば彼の母親の金言「彼らの意志を鍛えなさい」の一句に収斂すると評されたことなどもよく知られている。<sup>(4)</sup>

従って、ここでの私の責務は、たとえ様々な問題提起を内包するにせよ、とにかく教育に関するウエスレイアンの遺産が息の長い射程の中で問題解決に積極的な示唆を与えられる言辭に的を絞って考察することである。キングスウッド賛美歌の一節がそれである。

永く繋がらないままの対句、すなわち「知識」(knowledge)と「生きた信仰」(vital piety)を一つに結び合わせよう。<sup>(5)</sup>

この二行連句をめぐる注釈については、強火であぶられた黒こげで半焼きのハンバーガーと同様、過多と過少の両面があることを容認しなくてはならない。私は今、Wesley's Sayings Today [ウエスレーと現代]と題する本を編んでいるが、この対句には恐らく1章を割かなくてはならない。もっとも私の方法はいわゆる金言警句や実利的処世訓の収集ではない。むしろ歴史家としての私の関心は、ウエスレーの言説が抑もどのような状況において何を意図したも

(2) W. Reginald Ward and Richard P. Heitzenrater, eds., *Journal & Diaries* 6, in *The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley* (Nashville: Abingdon Press, 1976-), 23:19, May 27, 1776.

(3) *A Plain Account of Kingswood School*, in *Works* (Jackson), 13:296. ウエスレーの *Works* 中に見出される「大学」への言及19回のうち11回は彼の *Collection of Forms of Prayer* に含まれ、いずれの箇所でもウエスレーは大学のために祈りを捧げている。

(4) *Journal & Diaries* II, in *Works* (Bicentennial), 19:287.

(5) *Collection of Hymns* (1780), in *Works* (Bicentennial), 8:644. 5節から引用。なお3, 4および5節の内容については本論末尾を参照。

のであるかを見極めること、その上でウエスレーが本来意図したところをいかに現代の状況に創造的に適応し得るか、その可能性を問うことにある。ラッセル・リッチイがしばしば指摘するように、メソヂストの流れにはいわば語り部の伝統、すなわち自分たちが歩んだ道を物語ることによって自己理解を深めようとする行き方が認められる。従って歴史家としてのわれわれの課題は、本来の物語を正確に読み取り、同時にその解釈が的を射ているか否かを判断することである。物語のコンテクストを検証することによって理念の背後にある本来のヴィジョンや目的を抽出することができ、そのことが現代にも通じるメソヂストの伝統とその真理契機の再確認に繋がると思われるからである。

過去の伝統が幾世代も経て完全に保持、踏襲されることはあり得ないゆえに、今日、ウエスレーの主張をすべて正鵠を得たものとして肯んじることはできないであろう。彼の見解の中には、状況如何によってはむしろ忘却しあるいは看過してよいものもある。が、今ここではウエスレーのかなり辛辣な反大学（anti-university）的発言にこだわらないで、むしろより広範な教育問題、ことに今日の高等教育にも通じる彼の積極的な発言に注目したいと思う。そこで先ず、ウエスレーの教育とのかかわりをめぐって一般的なコメントを加えることからはじめ、次いで彼の教育的諸原理の意義に関して、今日的見地からする検討を試みることにしたい。

## ウエスレー時代の教育

ここで私は18世紀における英国の教育について詳しく述べるつもりはない。周知のごとく17世紀から18世紀にかけてイギリスの優れた教育理論が数多く生み出された。それらはしかし、教育の理想を掲げたにも拘わらず、結局は実現に至らなかった。この点に関してかつてサムエル・ジョンソンがこう述べている。「イギリスの教育は二人の偉大な英国人—ミルトンとロックによって阻害されてきた。ミルトンの構想はおよそ実行不可能であるゆえに適用されたことはなく、一方、ロックの場合はしばしば適用を試みたにも拘わらず、結果が出

ないままである」。<sup>(6)</sup>

この時代、英国の諸大学は沈滞し、教育の質は(ごく希に例外的なチューター[個人指導教師]の努力を除いて)殆ど全くと言ってよいほど学生の良心的誠実さに依存するほかはなかった。例えば、オックスフォードの学生は一般に「特権を享受する輩」を代表し、大学に寄宿する義務期間中でも2学期間は公然と解放されるという風であった。その他の必修義務、例えば訓練のために行うラテン語による司会者つき討論の際にも「便法」を使った安易な策が講じられた。すなわち、慣用的な言い回しを書き記したものを予め後輩の学生たちに譲渡し、彼らはいわば虎の巻を使って急場を凌いだわけである。ウエスレーの時代、オックスフォード大学で詩歌を講じていた教授が、最初の一年間は一度もキャンパスに足を運ばなかったにも拘わらず、さらに5年間の契約を更新したとか、あるいは学生に関して、卒業最終試験の前日、試験官と一緒にゴルフに興じ、翌日の試験はヘブル語(旧約)聖書の冒頭の3語は何かを尋ねるといふ、思いつき程度の形だけのものであったと言ふ話さえ伝わっている。

もちろん教育改革の試みも無くはなかった。例えばウエスレー兄弟がオックスフォードに在学中の1728年、学寮長の選任規定が改正され、チャールズ・ウエスレーがこれらの規制強化に極めて積極的に応えたことが知られるが、このことはウエスレー家の教育に対する厳しい姿勢に照らして決して不思議ではない。

## ウエスレー家の教育

父サムエル・ウエスレー(1662-1735)は、非国教派系の学校(ドチェスター・グラマー・スクール)に学んだ後、オックスフォード・エクセター・カレッジに進み、1687年、A.B.の学位を取得した。この父親の学究的な性向は生前に出版された数冊の著作からも十分窺知される。彼はまたロンドンの文学会会員で

---

(6) Alfred H. Body, *John Wesley and Education* (London: Epworth Press, 1936), 35に引用。

「アテネ評論」(Athenian Gazette)にも寄稿したが、ことに教育問題に踏み込んだ「非国教徒の私立学校における教育について」(“Concerning the Education of Dissenters in their Private Academies”)と題する論評を公にしている。また牧師補に宛てた書簡の中で、若い世代が読むべき周到かつ広範な図書リストを挙げているが、そのリストが1735年、ジョン・ウエスレーによって出版され、後の著述「聖職者に告ぐ」における提唱「豊かな知性の練磨」に資するモデルとなったと言われる。

母スザンナ・ウエスレー(1669—1742)は、やはり非国教派の牧師サムエル・アムズレーの子女で独学の人であった。彼女の子供たちの教育に関する書簡は、1730年代にジョン・ウエスレーに請われてしたためたものであるが、後年彼女の死去に際して、ウエスレーの「日誌」(Journal)に収録、出版された。<sup>(7)</sup>スザンナの外国語能力については多少誇張もあるが、彼女の豊かな教養は当時としては非凡なものであり、ことに子供への手紙の中には深く鋭い神学的洞察が散見される。<sup>(8)</sup>

ジョン・ウエスレーの兄弟たちもそれぞれ英国名門校の一つ、ウエストミンスター・スクールで教育を受け、3人ともそろって父親の後に従いオックスフォード大学に進んだ。後年、兄サムエルは英国デヴォン州ティヴァトンのブルンデル・スクールの校長になり、姉のエミリー(Emily)もリンカーン(Lincoln)で教師を務め、その後ゲインズボローに自分で学校を開設した。もう一人の姉ヘティー(Hetty)はThe Poetical Registerやロンドンの有力文芸誌The Gentleman's Magazineなど、少なくとも4誌に作品を発表している。<sup>(9)</sup>

(7) Journal & Diaries II, in Works (Bicentennial), August 1, 1742, 19:286—91.

(8) 例えば Letters, in Works (Bicentennial), 25:159—60, 164—67, 172—73, 178—80, 183—85他参照。

(9) Frederick E. Maser, The Story of John Wesley's Sisters (Rutland, VT: Academy Books, 1988), 22, 66.

## ジョン・ウエスレー自身が受けた教育

ウエスレーの教育歴については概ねよく知られている。言うまでもなく、スザンナは他の子どもたちすべてと同様、ジョンにも厳しい家庭教育を施した。10才の時、ジョンは生まれ育った牧師館を離れ、やはり英国の名門パブリック（私立）スクールであるチャーターハウスに入学した。その後1720年にはオックスフォードでも最も評価の高いカレッジ、クライスト・チャーチに進み、4年後にA.B.、1727年にはM.A.の学位を取得。その間、1726年にリンカーン・カレッジのフェロー（特別研究員）に任ぜられ、一時は論理学の試験官も務めた。

10年間に及ぶジョンのオックスフォード時代を通して、彼が読んだ900冊を超える図書文献リストが「日誌」(Diaries) に記録されている。その内容は科学、音楽、医学、哲学、倫理学など実に広範にわたるが、然もそれらの書物の多くを当時ウエスレーが要約し、自分の学生たちの使用に供するために選書抄録集(extracts)の形で4、5冊編纂し印刷に付し、さらに後年、その他の文献も加えた全50巻のThe Christian Libraryと銘打った図書文庫を出版している。

ところで、ジョンの大学歴は必ずしも順風満帆ではなかった。1730年代の後半、彼はB.D.の学位取得のための課程を修了する予定であった。この神学士の学位は牧師に任ぜられる按手や教区の招聘に際しての必要条件ではなかったが、大学の行政職や教会の特別な職位につく上では有用であった。しかし（大学に課程未修了の記録は残されていないが）ウエスレーの目標は達せられなかった。それは彼が礼拝のために準備したラテン語による説教が問題になったことに一因があると思われる。ウエスレーがイザヤ1:21を引いて「どうして忠実であった町（オックスフォード）が遊女になってしまったのか」と会衆に問うたからである。<sup>(10)</sup>

(10) Sermon 150, "Hypocrisy in Oxford," Works (Bicentennial), 4:389-419 (英語とラテン語)。

ジョンが1741年と同44年にやはり大学関係者の前で行った二つの説教も同様に、大学特有の閉鎖性や宗教的不感症からウエスレーが身を引くことに少なからず影響したと思われる。<sup>(1)</sup> 1744年に大学教員や学寮長を対象にしてなされた「聖書的キリスト教」(Scriptural Christianity)と題する説教は、オックスフォードの町に蔓延する非宗教的な風潮に対するウエスレーの抑えきれない反感を包み隠さず言い表わしている。先ず彼は、キリスト教がキリストの時代から伝播された長い歴史を概観した上で、今や真の聖書的キリスト教は何処に存在するかと問い、セント・メアリー・チャーチ(カレッジ)の会衆の前で心情を吐露して言う。「そこで私は優しい愛と柔和の精神をもってあなた方に聞きたい。この(オックスフォードの)町はキリスト教の町ですか。ここにキリスト教、聖書のキリスト教が見出されるのでしょうか…すべての文政長官、カレッジや学寮あるいはそれぞれの学会の長や理事の方たちは(この町の住人の皆さんのことは別として)「心と意思を一つにして」(使4:32) いるのでしょうか。

次いで大学の教員(fellow)たちに面と向かって訴える。「あなた方は(自分の学生たちに)毎日に“愛だけは決して減びない”(1コリ13:8) こと…愛がなければ、あらゆる知識に通じていても、それらは単に見事な無知、尊大な愚かさ、魂の思い煩いに過ぎないことを教えてください。あなた方が教えるすべてのことが、現に神への愛、そしてそれ故の全人類への愛に結びついていますか…敢えて問うことを許して頂きたいが、あなた方はあなた方が引き受けたこの重大なわざのために、もてる力をすべて擲っているのでしょうか。思いと力を尽くしてこのことのために労しているのでしょうか。あなた方の魂の働きを駆使し、神があなた方に預けて下さったあらゆる賜物を活かし、もてる力の限り奮闘しているのでしょうか。

さらにウエスレーは彼ら大学教員たちの「精神の高慢や尊大な態度、短気、

---

(1) Albert Outler 教授は、オックスフォードにおける説教(2)「九分クリスチャン」と(4)「聖書的キリスト教」 in Works (Bicentennial), 1: 131-41, 159-82が何れもウエスレーの説教集(1746)の冒頭部分に位置することが、「これ以後大学内改革者としての役割を担うことを断念する」ウエスレーの意思表示であると指摘する。Ibid., 1: 109.

気難しさ、怠惰、無精、大食、好色、はたまた天下周知の無用性…」について直言する。その一方で、学生たちに対してもこう問うている。「あなた方は謙遜で、教えやすく、助言を受けることを望んでいますか。それとも強情で、我を通し、無謀で、傲慢ですか。あなた方は両親に対するように、目上の人々に対して従順でしょうか…あなた方は力を尽くして自分の研究に打ち込み、同時に容易な仕事にも忠実ですか…あなた方は自分の時間よりもむしろ財産に関する優れたマネージャーではないですか…（そしてウエスレーはこの段落をこう結んでいる）…あなた方の多くは神に対して不真面目であり、あなた方お互いに対して、またあなた方自身の魂に対して軽薄な世代なのです」。(12)

説教はこういう語調で貫かれている。副総長（英国の大学総長は名誉職で実務は Vice Chancellor が執る）はウエスレーに説教のノート提出を要求したが、これはウエスレーが面倒なことに巻き込まれ、恐らく今後説教に招かれることはないという通常の予告を意味した。大学当局は、彼を咎めないで却って無視する方途を選んだが、事実上ウエスレーが大学の説教者として招かれたのはこの時が最後であった。

ウエスレーのこのような大学に対する激しい批判的言辞にもかかわらず、われわれはここで彼の教育に関する積極的な考えを抽出したいと思う。現にウエスレーの教育理念は彼自身による教育機関の創設によって実を結んだのであるが、とりわけウエスレーが「信仰」と神と隣人への「愛」の一致を説き、「学ぶこと」が「愛すること」に結合される必要性を確信していた点に注目しなくてはならない。ウエスレーはこれらの原理が大学生たちにとっても練達と奉仕の生活を確立する上で特別な意味を持っているという実践的な知の持ち主でもあった。

---

(12) Ibid., 1 : 174-79.



## ウエスレーの教育理念とプログラム

ウエスレーは、教育に関する明示的な論考を数編著している。「子供を教育する方法」(1783)では、よい教育にとっての規律の重要性と真の宗教の意義について強調し、「子供たちの教育について」と題する説教(1783)は、家庭教育における両親の責任をかなり詳しく説くが、その内容はエプワースの牧師館における彼の母(スザンナ)の教育方針を記した手紙を想起させるものである。一方、「教職者に告ぐ」(1756)は教職として備えるべき必要条件としての豊かな教養を概説したもので、1735年にウエスレーが出版した彼の父(サムエル)の「若き聖職者への手紙」<sup>(13)</sup>の語調や内容を色濃く映し出している。またジョン自身が執筆した小冊子 Plain Account of Kingswood School (1781)は、中等教育機関に関する歴史的考察と教育学的洞察を合わせ内包している。

さらに加えてウエスレーは教育過程の使用に供するために、5冊の文法書(英語、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語)、「コンサイス英国史」(全4巻)、「キリスト教文庫」(全50巻)、「論理学概論」の他、キングスウッド・スクールの教科書<sup>(14)</sup>など、様々な教材を執筆・編纂し出版している。

その他にも、ウエスレーは自分の教育的プログラムに結びつく数々の著述を出版しているが、このような大変な量の刊行物そのものが、彼の教育的ミッションの一環として企画されたのである。あらゆる分野のトピックに関する実に500点近い著述(その多くは2巻以上に及ぶ)が出版され、その中には「ローマ小史」「自然哲学」(全3巻)なども含まれる。もちろん彼はオックスフォード大学の終身在職権(tenure)を獲得するためにこれほど多数の著述を出版する必要はなかったわけで、むしろウエスレーは何とかなして民衆に良質の教育を

(13) ウエスレーが必要と見なす「修得すべき資質」のリストには、教職の務めと聖書に関する知識、母国語、歴史一般、諸科学(論理学、形而上学、自然哲学、幾何学)、教父および(人類)世界についての学識が挙げられている。

(14) 彼は Kingswood School のために 2 グースほどの教科書を作成した。

施そうと努力を傾注したのである。彼の著作がすべてのメソヂストグループの信徒たちに届くために、牧師たちの教派連合が宗教書行商人のネットワークとして機能し、一人一人が各地のメソヂスト会の本屋の役割を担った。

ウエスレーがとりわけ「全体人間」(whole person)の機能の一部としての知的能力の開発方途として強い関心を抱いたのは、自ら教育機関を支援し、あるいは創設することであった。すでに早く1720年代にウエスレーはオックスフォードのいわゆる慈善学校(charity school)グレイ・コート・スクールに対する財政的支援を行い、1730年代にはオックスフォード・メソヂストの一人であるウィリアム・モーガン(William Morgan)がオックスフォードの多数の孤児や貧しい子供たちのために開設した学校に仲間と協力して教員を送り込み、備品を供給した。またウエスレーはジョージアの学校にも関心を寄せ、同胞であるウィリアム・デラモット(William Delamotte)に子供たちをしっかりと教えるように励ましている。

当時の英国の学校を取り巻く環境を知るにつけ、ウエスレーはショックを受けていた。理由としては、学校が腐敗や悪弊が蔓延する都市や大きな町に集中する傾向などが数えられるが、ウエスレーはまた殆どの学校が、未だ悪い風潮に染まっていない良い生徒たちを迎え入れ、人物、学問ともに優れた教師たちを選任する上での十分な配慮に欠けていると感じていたようである。<sup>(15)</sup>そして「これらの明白な欠陥を取り除いている」学校を見出すことが容易ではないゆえに、ウエスレーは自ら独自の学校設立を決意するに至ったのである。彼の教育理念は、最初にブリストル近郊のキングスウッド・スクールで、次いでロンドンのファウンダリ・デイスクール(Foundery day school)、そして後にウッドハウス・グローヴ(Woodhouse-Grove)に創設された諸学校を場として実践に移されたが、ウエスレーの仲間や同胞たちもレイトンストーン(Leytonstone/Mary Bosanquet, Ann Bolton 他)やトレヴェッカ(Trevecca/Lady Huntingdon)あるいはハイ・ワイコム(High Wycombe/Hannah Ball)にそれぞれ類似のプ

---

(15) ウエスレーは、これらの諸問題を彼の“Plain Account of Kingswood School”, in Works (Jackson), 13: 290-92において概観している。

プログラムによる学校を開設した。

キングスウッドのカリキュラムを一瞥すると、そこにウエスレーの中等教育の領域に関する諸原理の実践的適用を認めることができる。彼の目論見は生活上“役に立つ”有用な学習、すなわちあらゆる方面の実践的訓練を包含することであった。主要コースには読み、書き、算数の他、英語、フランス語、そしてラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語など古典語、さらに歴史、地理、年代学、あるいは修辞学、論理学に加えて、幾何学、代数、物理学、また音楽、倫理学などの諸科目が含まれるが、後には美術や天文学も組み入れられた。このような学習計画は当時のパブリック・スクールに典型的なカリキュラムを範とするものであったが、ウエスレーは特に音楽、物理、ヘブライ語、さらに教材として優れた宗教的人物の伝記、聖書、キリスト教古典など加え、彼が指定した教科書の多くは読書と翻訳という二重の目的で使用された。<sup>(16)</sup>

ウエスレーはまたキングスウッド・スクールにおいて大学のカリキュラムにも比肩される「専門学習コース」(a course of academic learning)を設けた。この高等教育も視野に入れた学習計画は広範なコアカリキュラムと目されるものを基本とし、いわゆる「選択」の幅は殆どないと言ってよい。4年コースの学習は毎年同様のパターンを踏襲し、文法、古典、歴史、詩歌、フランス文学、数学、あるいは科学、倫理、哲学、そして牧師・教職養成を念頭においた聖書、教理、実践神学など基礎10科目を課した。古典にはホメロス、ホラティウス、キケロ、タキトゥス、プラトンその他が含まれ、英語の詩歌はスペンサー、ミルトン、シェクスピアに集中し、数学と科学の方面ではユウクリッド、アイザック・ニュートン、ワットの天文学、哲学はロック、マレブランシュ、それに英国王立学士院の会報 *Philosophical Transactions* などを取り上げた。フランスの作家としてはバスカルやラシーヌ他が含まれる。この学習要綱はウエスレーがロンドン、ブリストル、ニューカッスルに設けたメソヂストの三つの講義所

---

(16) このカリキュラムはウエスレーの“Short Account of the School in Kingswood,” *Works* (Jackson), 13:287-88で図表化されている。

(preaching house) が所蔵する指定基本文献の内容と極めて類似している。<sup>(17)</sup>

このカリキュラムには以下列挙するいくつかの著しい特徴が見られる。

(1) まず、教科内容にフランス作家を取り入れたのは新機軸であると言えよう。実はあまり学習成果が上がらず、ウエスレー自身もフランス語に対しては多少偏見を抱いていたにも拘わらず、1789年まで40年近くキングスウッドスクールにはネイティブの教師が継続して招聘された。しかし1750年、ヴォルテール [1694—1778] の *Henriade* を読了したウエスレーは、「日誌」に次のように記している。「私はこれまで以上にフランス語がヨーロッパの中でもっとも粗末で価値の少ない言語であると思うようになった。バグパイプとパイプオルガンの格差と同様、フランス語とドイツ語やスペイン語とは比ぶべくもない。とりわけ詩歌に関しては、その韻律や決まって押韻で書き綴る癖のある粗野な韻律（ひどい三重押韻、況やしばしば見られる押韻の誤りなど言うまでもないが）、それらを考えると、フランス語ですぐれた詩を書くことは簡単な口琴で妙なる音楽を奏でることにも似た不可能事である」。ウエスレーがフランス語の詩歌についてどのように考えていたかはこれで明白であろう。

(2) 哲学の領域では、学生が経験主義に立つロックとデカルト派のマレブランシュの両方に親しんでいたと推測される。従ってこの場合、ウエスレーは特定の学派を強要することなく、それが恐らく当時の傾向でもあったと思われる。

(3) ウエスレー自身のこの学科カリキュラムに関する評価は不動のもので、「このコースをきちんと履修するものは、オックスフォードやケンブリッジの卒業生10人中9人より優れた学徒になるだろう」と言明している。<sup>(18)</sup> しか

(17) *Minutes of the Methodist Conferences* (London, 1862), 1: 29 (1745). これらの文献を類別すれば、古典（ラテン、ギリシャの散文、詩歌）、歴史、科学、英詩、ヘブライ語聖書、実践神学、物理（数学）などが含まれるが、最後の部門はウエスレー自身の特別な関心領域で Kingswood のカリキュラムには見当たらない。

(18) "Short Account," *Works* (Jackson), 13: 389. *Plain Account* の中でウエスレーは「言語力、芸術、諸科学その他およそいかなる学問探求の分野でも、ある程度の能力を持ち合わせているのであれば、通常オックスフォードやケンブ

しながら、ウエスレー以外の人々がもっとも注目し、常に想起されるのは宗教教育の強調と時間や規律における厳格さである。先にも一言したように、ウエスレーは多くの場合、彼の母親のルールに従ったが、その内容はロックなどの教育論から示唆を得たもので、今日の見方からすれば過酷とも思われ、当然のことウエスレーのアプローチに対しては批判もあった。「しばらく前に私と話していた一人の紳士が…子供の教育の方法について…彼らをあまりに厳しく躾けること、そして子供たちが欲している以上に宗教を教え、彼らの意志如何にかかわらず頻繁に宗教を語り、押しつけることに對し猛反対した…。私は（それらすべてが）、ルソーの「エミール」のような見方に立てば至極もっともな異論であることを知っている。私自身はしかし、この一書を自負心の強い不信心者がものした空虚で愚かな思慮を欠く作品であると見なしている」。

1770年、ウエスレーはルソーの教育論を読み、「私はまったく失望した。おそらくルソーのような自意識過剰の気取り屋は他にいないだろう」とコメントし<sup>(19)</sup>、続けてこう記している。「もとより私のルソー評が、これまで私が触れたもっとも優れた知者や偉大な人物のそれとは反対の極に位置することを知っている。しかし、もしルソーが是認されるのであれば、われわれはこのキングスウッドにおいて無自覚のままいかに多くの過ちを犯し、今も害を及ぼしていることか、（ルソーの仮説が正しいのであれば）われわれはこの学校で一度に50人の生徒たちを駄目にしつづけていることになる」<sup>(20)</sup>。

だがウエスレーは彼に向けられた様々な批判にも拘わらず、自分の計画をあくまで翻さなかった。「今ここでは、さらに偉大な人物（ルター）のひそみに倣って“我ここに立つ。神我を助け給う！”とすることができる。神の助けによって私は過去40年に亘り、私に対して激怒し悪口雑言の矢を浴びせ、そのことによって神に仕えていると考える人々の子弟の中に立ちつづけてきた…とり

---

リッジで7年を要するところ、ここでは3年以上費やすことはない。この点私はたとえ非難を浴びても、ずっと責任を負う」と述べている。(13:296)

(19) Journal & Diaries 5, 3 Feb. 1770, 22:214.

(20) "A Thought upon the Manner of Educating Children," in Works (Jackson), 13:474.

わけ今は、時が縮っている。それゆえ、もしペースを落とせば、私の頭髪は私の意志に反して白くなるであろう。私には恐れるものは何もなく、この学校に何の不足もない。ただ自分の馳せ場を喜びをもって走り抜くことだけを希っている」。(21)

## ウエスレーの教育的原理

ウエスレーの教育に関する主要原理の一つは、教育の営みが、知識と信（敬虔）、知恵と聖化の統合を必然たらしめるというものである。しかしこの点は必ずしも正しく理解されていないし、またこの理念と結びついた言表が常に適切に引用されているとも言えない。例えば南メソヂスト大学の中庭を囲むロースクール・フロレンスホール（もと神学部が置かれていたカービーホール）の真鍮で縁取った大理石のフロアーには、ウエスレーの言葉として“Let us unite the two so long divided, knowledge and vital piety”という一文を記した大きな盾がはめ込まれているが、この引用は誤りで、正しくは“Unite the pair so long disjointed/ knowledge and vital piety”である。またこのフロアの一部に堅固にはめ込まれたチャールズ・ウエスレーの一句がやはり間違っってジョン・ウエスレーに帰せられており、永年に亘り同大学パーキンス神学校要覧の表紙にも同様の誤りがあった。<sup>(22)</sup> そこでわれわれの課題は、ウエスレー兄弟がこの「知識」(knowledge)と「生きた信仰」(vital piety)というタームを用いた際の意図は何であったかを問うことである。かりにこれらの用語を擬人化することを求められたとすると、読者は恐らく博学な思想家あるいは敬虔な聖人といったイメージを描くと思う。デューク大学のチャペルを訪れる人々はここでウエスレイアンの教育理念を象徴する人物イメージに直に触れることがで

(21) Plain Account, 13 : 300.

(22) この一句の出典は、チャールズのHymns for Children所収“*At the Opening of a School in Kingswood*”と題する賛美歌（1968年版United Methodist Hymnal 344番2節、1780年版Collection of Hymns, in Works[Bicentennial]461番5節）。

きる。イングリッシュ・ゴシック様式の十字形礼拝堂ネーブ（身廊）の後方、フレントロップ・オルガンの下方壁面のくぼみに彫像が二体あり、チャペルのガイドブックにはそれぞれが“Eruditio et Religio”というデュークのコットー（通常、ウエスレイアンの発想を端的に反映させる意図から“knowledge and religion”と英訳される一句）を象徴すると記されている。しかしながら、見たところ何れの彫像が「知識」と「信仰」の何れを象徴しているかを同定することは容易ではない。というのも両者とも敬虔でしかも思慮深い人物に映るからである。ウエスレーの知と信に関する理解にも同様の重層性が認められる。ウエスレーにとっての「知識」とは純粹に知的な能力に限られるものではなく、むしろ人間の救いに不可欠の自己理解を促す媒体（チャンネル）を意味する。他方「生きた信仰」とは神の愛に基づく信仰的姿勢（スタンス）だけではなく、隣人愛を通して証しされる社会的実践をも包摂する。そしてウエスレーは、この二つのコンセプトの関係を確証するために「愛がなければ、すべての博識は見事な無知に等しい」（“without love, all learning is but splendid ignorance”）<sup>[23]</sup>という提唱を繰り返している。この関連で、ジョン・ウエスレー自身が用いた「知恵と聖潔（化）」（wisdom and holiness）という並行句も彼の教育観を理解する上で役立つ。<sup>[24]</sup>

ウエスレーのアプローチはまた独自の方法と訓練（discipline）を伴うものであった。彼の教育プログラムは一定の学習カリキュラムとその実施のための厳格なルールに則り、決して英国のパブリックスクールの古典的要綱と別様のものではなく、むしろその改善を目指すものであった。そこで、当時の教育的

(23) 学者の中にはこの句をアウグスティヌスに帰すものもいるが、なお確証は得られていない。ウエスレーは1780年8月10日付ロース監督（Bishop Lowth）宛ての書簡でこの点をさらに強調し、次のように述べている。「監督殿、私は決して学ぶことを軽視するものではありません。知識の価値は十分認めています。しかし、とりわけ牧師にとっての信仰の価値は知識のそれと比ぶべくもありません。宗教を解しないものにとっては、知識はまさしく“豚に真珠”の類ではないでしょうか」。Works (Jackson), 13:143.

(24) ジョン・ウエスレーは、この句を自著の中で少なくとも6回使用しているが、チャールズから直接引用した例はない。

状況にウエスレーが挑み、企図したところを七つの側面から一瞥しておきたい。

(1) ウエスレーの認識論への関心は、彼が学生たちに対して教材の内容理解の重要性を強調したことと結合している。したがって、ウエスレーは教材を単に機械的に暗記することではなく、あくまで内容についての熟考と省察を試みることを促した。

(2) ウエスレーは「白髪まじり」の学徒も含め、全年齢層の学生を受け入れたが、成人教育への関心は、彼自身の全生涯に亘る継続学習の延長線上で芽生えたものである。<sup>(25)</sup>

(3) 母親（スザンナ）の模範に倣って、ウエスレーは女子教育を押し進めたが、後にメソヂスト年会は男子生徒と同様女子生徒に対しても学費支援を行うようになった。<sup>(26)</sup>

(4) ウエスレーはまた、両親を教育の過程に参加させるために努力を傾注し、父母たちは子弟の学習成果について定期的に学校で担当者（steward）と話し合うことを求められた。<sup>(27)</sup>

(5) 学校における生徒と教師の比率を低くし（およそ5対1）、教師が生徒たちとふれ合い、課外活動に力を入れることが目指された。

(6) キングスウッドのような全寮制（寄宿）学校（boarding school）に加えて、ウエスレーは、家から通う子供たちのためにロンドンのファウンダリ・スクールなど通学学校（day school）も開設した。

(25) ウエスレーの最晩年10年間の読書記録には、北アメリカや中国の内政事情に関する文献、同時代の Voltaire, Olaudah Equiano らの自伝、Virgil や Dante の古典類、あるいは William Shakespeare や Alexander Pope の作品などが含まれる。Years and Legacy of John Wesley (Dallas: Bridwell, 1991), 72-77 参照。

(26) Kingswood School における女子生徒に関しては Gary M. Best, "Wesley and Kingswood", in Methodism and Education: From Roots to Fulfillment, ed. by Sharon J. Heis, 2000, 37-55 を参照。

(27) Kingswood 校の steward たちは「毎水曜日の朝、（生徒たちの）両親と面談し、彼らが神の意志に則り家庭で子弟を訓練するように勧める」ことを指示された。In "A Plain Account of the People Called Methodists," Works (Bicentennial), 9: 279.



(7) ウエスレーは社会的、経済的な階層の垣根を取り除き、あらゆる境遇の子供たちを同じ学校で一緒に学ばせることに心を砕いた。万人が神の子であり、人間は誰でもみな学習を必要とすると確信していたからである。<sup>(28)</sup>

ウエスレーの教育観は、あくまで神の働きを基底とするが、同時に彼は神の意志の道具として、またキリストに倣うものとして、神を信じる心と生き方の模範となる人間のわざに信頼をおいていた。<sup>(29)</sup>従って、当然のことキーパーソンは教師であり、ウエスレーによれば教師こそ信仰と理解力を兼ね備えた人物でなくてはならない。<sup>(30)</sup>またあらゆる学校規則のリストにも拘わらず、強調点はルール自体ではなく、あくまで美德 (virtue) あるいはむしろ価値観 (value) におかれ、義務の倫理と美德の統合という見地から正・不正の識別のみでなく、根源的な善・悪の判断を踏まえた主体的な決断が促された。このような善なるもののモデルを基本とするいわば徳育は、模倣によって促進され、ついに人間の変革 (transformation) をもたらす。そしてこのような精神的、知的な人格形成の過程については、当時のメソヂストたちによる幾多の自伝がよく証言するところである。<sup>(31)</sup>

繰り返し言えば、ウエスレーの教育プログラムの特色はとりわけ体 (body)、

(28) ウエスレーのこの点に関する徹底した考えは、彼が北アメリカの農園で働く奴隷向けに作成した教案や南カロライナ州の若い女性奴隷と交わした個人的会話の内容から窺い知ることができる。Cf. Journal & Diaries 1, in Works (Bicentennial) 18: 180-81, 23-27

(29) 「キリストに見られる同じ思いをもって、彼が歩まれたように歩むこと」(フィリ2:5; [ヨハ2:6参照])、と言われるところにウエスレーの「キリスト者の完全」に関する一貫した記述的説明の中心があり、知識と愛の結合に関するもう一つの証言と目される。Cf., Richard P. Heitzenrater, "The Imitatio Christi and the Great Commandment: Virtue and Obligation in Wesley's Ministry with the Poor," in M. Douglas Meeks, ed., The Portion of the Poor, 1995, 49-63.

(30) Joseph Benson に宛てた1769年12月26日付けの書簡を参照。Letters (Telford), 5: 166.

(31) ウエスレーが1778年に創刊した Arminian Magazine (月刊) の誌面は、やがてウエスレーに同調する人々の共励のために寄せられた歴史上あるいは同時代の信仰的聖徒たちの生と死を物語る証言で埋め尽くされた。

知 (mind)、霊 (spirit) のすべてを備えた「全体人間」(the whole person) の変身 (change) を目指すところにあった。<sup>(32)</sup> ウェスレーは、人々が知りまた達成し得る様々な可能性を発見し、絶えず罪と無知という限界を乗り越えて前進することを希ってやまなかった。この人間変革の過程の中核を成すのが自己認識 (self-knowledge) [神学的には「回心」] であるゆえに、われわれは自己変革を遂げるために、先ず自らの無知と罪性について正しく認識する必要がある。この見解はジョン・ロックとともにヨハン・アモス・コメニウスやジョン・ミルトンのそれとも響き合うものである。コメニウスは教育の目標は多様な専門知識の獲得のみでなく、美德と敬虔の涵養にあると考え、その立場からウェスレー時代のモラヴィア派の教育モデルを編み出している。<sup>(33)</sup> ミルトンによれば学習の目的は神の知識を正しく再獲得することによって、アダムとエバの失樂園を回復することにある。<sup>(34)</sup>

ウェスレーはこのような見解に共鳴し、ウィリアム・ローの「教育とは周知の如く、失われた人間の本来の完全 (original perfection) を可能なかぎり修復することを動機・目的とする」という主張を引用している。<sup>(35)</sup> ウェスレーにとって「完全」あるいは「聖化」は清冽な愛、すなわち墮落した人間性の全的再生 [神学的には「義認」] によって可能となる神への愛と隣人への愛を意味した。ウェスレーは終生この「完全」の教理を彼の神学の中核に据え、メソヂスト関係諸学校の理想として掲げた。かくして教育は「恵みの手段」の一つとして、墮落によって失われた神の創造における (知恵と聖化の賜物を備えた人間の) 本来の完全を修復する手立てとなる。<sup>(36)</sup> 神を信じるものたちのこのよう

(32) 説教「良き家令」の中で、ウェスレーは終わりの裁きに際してキリストが信仰者たちに尋ねるいくつかの問いを介して、人間の統合性にかかわるこれらの際立ったイメージを用いながら「あなたは、あなたの魂と身体、あらゆる思い、言行のすべてを、あなたの身体と霊で (神) を讃えるために一つの愛の炎となし、聖なる犠牲として捧げましたか」と訴える。Works (Bicentennial), 2 : 296.

(33) Body, 49.

(34) Ibid., 34.

(35) “On the Education of Children,” Works (Bicentennial), 3 : 348における Law の A Serious Call to a Devout Life よりの引用。

(36) 「賢さと聖さの資質において、さらに高位の被造物がなお欠けていた。Natus

な自己変革の目標は「無くてなならぬただ一つのもの」すなわち「神の像」の回復に他ならない。<sup>37)</sup>

以上述べたところから、ウエスレーにおいてはある意味で教育の目的と宗教のそれとが別ではないことが明白である。知識と生きた信仰、知恵と聖化、学ぶことと愛することが、人類に対する神の目的を基底とするウエスレーの教育的ヴィジョンにおいて本質的に結び合わされている。G. ベスト校長が述べるように、ウエスレーは「万人（とりわけ真の教育を受けたもの）が、普通でない愛（extraordinary love）によって普通のこと（ordinary things）を実践する生き方へと促されている」というマザー・テレサの呼びかけに心底から共鳴するに違いない。

## 結 語

今この「教育の時代」と言われるアメリカで、人々の間で価値観や倫理観の確立、そして知、情、意の統体としての人格の成長こそ教育の過程にとって不可欠の要因であるという切実な希求の声が毎日に高まっている。私は先週ラヂオを通して、アメリカ社会の犯罪や麻薬問題と本気で取り組むためには、学校で価値観をしっかり教える必要があるという強い主張のリポート番組を聴いたが、その一方で、学校における宗教教育を排除すべきだとする論議が絶えない。しかし問題は、およそいかなる「宗教」（あるいはウエスレーの言う意味での「生きた信仰」）に基づかない「価値観」の教育など果たしてあり得るかということである。

単なる「価値教授」は無色中立の価値評価であり、価値の実質を伴わない。教育理念の内実化のためには確かな価値観に基づく展望が必要であり、あらゆる教育的営みは何らかの規範的価値観を不可欠とするゆえに、その価値観の中

---

homo est. そこで神は人をご自身の像に創造された。神が神の像に人を造られた！のである」。説教「人間の墮落」Works (Bicentennial), 2: 409.

(37) Works (Bicentennial), 1: 310.

身が何であるかが真率に問われなくてはならない。初期アメリカの高等教育機関においては、しばしば大学やカレッジの学長が倫理学のコースを担当し、その内容が大学教育の生命と個性の頂点を成していた。その際、当然のこと担当者はシラバスの内容として倫理綱要の規範を提示した。価値観や道徳観には明白なモデル、一定の拠りどころ、特別な含意がある。「善」とは悪のない状態以上のものであり、また禁令リストとも本質的に異なる。美德、生きた信仰あるいは聖化も同様に、罪性のない状態以上のもの、むしろ世俗のあらゆる人間関係を超越する愛という根源的志向性に基底をもつ。

今の時代、カレッジも大学も、知性ととともに感性と良心を兼ね備えなくてはならない。また高等教育機関と社会の多様な局面—地域文化、都市環境、あるいはその学校と特別な関係を持つ同窓、寄付者、保護者、学生など様々な人間集団—との生きた相互作用の必要性が一層痛感されているが、その際、感性や良心の本質（もしくは中核）を成すものは何か。ウエスレーの理解に従えば、良心の中核を成すものは愛であり、それこそ（排他的ではないにせよ）キリスト教に顕著な見地であると言えよう。それぞれの教育機関が全学横断的に（あるいは個別学部で）周知徹底された自覚的かつ明確な価値的、倫理的方向性を主体的に選択することが望まれる。また現今の複雑な世界における同意に基づく見識ある高潔な意思決定に際しては、学生や校友たちに負うところも大である。

教育の営みは、結果において真理や道徳に関する多様な主張の中から明示的もしくは暗示的な価値観に基づく選択を可能ならしめる。1914年、J.A. スミスはオクスフォード大学の学生集団に対して厳格な学科カリキュラムの実施について語り、「諸君が勤勉かつ賢明に学び、所定の課程を修了した暁には、人々がナンセンスなことを言うときに問題点を鋭く見抜くことができなくてはならない。それこそ教育の中心眼目であると思ふ」と呼びかけた。<sup>(38)</sup>すなわち、真に教育を受けた人間とは、文化の深みの次元への洞察力、善悪に関する覚め

(38) Jan Morris, ed., *The Oxford Book of Oxford* (Oxford: Oxford University Press, 1978), 331.

た感覚を体するものの謂われである。したがって如才なさと倫理観、慇懃な振舞いと高貴な有り様との違いをきちんと語ることができるし、もはや学位の取得と学問の精神とを混同したり、似非信心 (religiosity) と生きた信仰 (vital piety) を取り違えることもない。「愛がなければ、すべての博識は見事な無知に等しい」というウエスレーの提唱が新しく響いてくる。

## Kingswood Hymn

For Children:

3. Error and ignorance remove,  
     Their blindness both of heart and mind;  
     Give them the wisdom from above,  
     Spotless, and peaceable, and kind;  
     In knowledge pure their minds renew,  
     And store with thoughts divinely true.
4. Learning's redundant part and vain  
     Be here cut off, and cast aside;  
     But let them, Lord, the substance gain,  
     In every solid truth abide,  
     Swiftly acquire and ne'er forego  
     The knowledge fit for man to know.
5. Unite the pair so long disjointed,  
     Knowledge and vital piety;  
     Learning and holiness combined,  
     And truth and love, let all men see  
     In those whom up to thee we give,  
     Thine, wholly thine, to die and live.<sup>139</sup>

---

(39) Collection of Hymns (1780), Works (Bicentennial), 6: 643-44 (cf. #344 in the 1968 United Methodist Hymnal).